

「学びの居場所」としての自主夜間学校

—「いいあす京都」における包摂的实践と相互変容のプロセス—

XU Puhan

本研究は、京都市の自主夜間学校「いいあす京都」を対象とし、公立夜間中学の制度的枠組みから排除される多様な成人学習者に対する教育保障のあり方を検討した質的研究である。背景には、義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律（以下、教育機会確保法）以降、公立夜間中学の設置が進む一方で、「卒業年限」「週 5 日通学」「高校卒業資格者の入学制限」などの制度的条件によって、「学び直し」を望む人々がその網目からこぼれ落ちているという問題意識がある。こうした状況のもとで、「いいあす京都」はこうした制約に縛られない柔軟な学びの場として機能している。

本研究では、参与観察、半構造化インタビュー、「いいあす京都」開校一周年記念文集などの作文資料の分析を組み合わせることで、同校における日常実践とそこに生じる相互行為を丹念に記述した。そして、この場を単なる学習指導の場でも、休憩・居場所機能だけを担う場でもない、「ケアと教育が一体化した固有の実践空間」として、「学びの居場所」という概念から捉え直すことを試みた。

分析の結果、「いいあす京都」の特徴として三点が明らかになった。第一に、「ケアと教育の一体化」である。学習は常にマンツーマンで行われ、スタッフは学力だけでなく生活の悩みや健康状態にも目を配りながら、学習者のペースに合わせて教科内容を調整する。学習の合間にはティータイムでお菓子を分け合い、東九条マダンへの出店や餃子作り、天体観望会などのイベントでは、共に作業し、食べ、語り合う実践が積み重ねられる。こうした過程で、学習者は文字や計算といった技能を身につけるだけでなく、「自分はここにいてよい」という感覚や、他者とつながるための言葉を獲得していく。

第二に、「支援関係を越えた相互変容」である。学習者は、井上のいう「治癒→社会化→自主化」のプロセスを、具体的な相互行為のなかで経験している。傷つきや孤独を抱えた学習者が、まずは安心して受け入れられることで「ここにいてもよい」という感覚を取り戻し（治癒）、やがて全国交流会や学習者交流会で自らの経験を語り、将来の夢を語るようになる（社会化）。さ

らに、イベントの企画や自主制作ビデオの撮影、東九条マダンでの調理・販売などに主体的に関わることによって、学びの場そのものを「共に創る」担い手へと変化していく(自主化)。同時に、スタッフもまた一方的な「教える者」ではなく、学習者の姿に触発されながら「共に学ぶ者」へと変容していく。学習者とスタッフが互いを「支援する側／される側」に固定しない関係を築いている点に、この場の重要な特質がある。

第三に、「制度と草の根の補完関係」である。公立夜間中学は、義務教育課程の履修や卒業資格、体系的なカリキュラムを保障する一方で、入学要件や出席管理などの構造的制約から、健康問題や不安定就労、高卒資格の有無など多様な事情を抱える学習者を十分には包摂しきれていない。それに対して、「いいあす京都」は、入学資格や通学頻度に柔軟に対応し、卒業後も学び続けたい人、制度にうまく適応できない人を受け止める場として機能している。両者は対立関係ではなく、役割を分担し合うことで、多様な学習ニーズに応える「重層的なセーフティネット」を形成し得ることが示唆された。

以上を踏まえ、本研究は、自主夜間学校のような自主的参加の場において、学習者が支援者との双方向的な関わりに身を置くと、「文字を学ぶこと」と「居場所を得ること」が分離された二つの機能ではなく、学習者自身の実践によって一体的に実現されるプロセスであることを明らかにした。その結果、「夜間学校における居場所」を、ただ外部の圧力から避難する静的なシェルターではなく、人と人との関係性のなかで自己を変容させていく動的な「変容の場」として再定義した。

そして、教育機会確保法下、の夜間中学政策は、公立夜間中学の数的拡充だけでなく、公立と自主が相互に役割を認め合い、それぞれの強みを活かして補完し合う仕組みづくりを進める必要性を示している。また、「いいあす京都」の実践は、国籍・年齢・障害の有無をこえた人々が、支援関係を超えて「共に何かをつくる」経験を通じて、多文化共生と人権尊重を具体的に学ぶ、市民レベルの草の根実践のモデルとなっている。

本研究の課題として、以下の三点が挙げられる。第一に、京都市の一事例に基づく研究であるため、他地域との比較研究が必要である。第二に、分析期間が数ヶ月から1年程度に限られているため、長期的影響を明らかにする追跡調査が求められる。第三に、継続参加できた学習者に焦点を当てているため、場に馴染めなかった事例も含めた包括的な分析が必要である。しかし、本研究が描き出した、国籍も年齢も異なる人々が互いの弱さを認め合いながら共に学び合う実践は、分断と孤立が深まる現代社会において、教育が本来持つ「希望」の形を明確に示している。